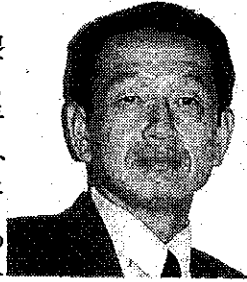


異次元の世界はあるか？

美和 勇夫



過ぐる年も、多くの人達があちらの世へ旅立られました。(喪中のハガキでいっぱいです)

ふしぎなもので、昨日までこの世におられたかたがたが、どこへ行つてしまわれますかさっぱりわかりません。

二十世紀の科学が進歩したと言っても人間がどこから来てどこへ行くのか全くわかりません。だから、山田風太郎の

ように「地上では無限の虫達があつてなく草葉のかげで死んで土にかえるが、実は人間もその虫ケラとなんらかわることはない」と言う人が出てくる。

日本人の死生観は一般に暗い。だから、しょうこりもなく「暗い葬儀」をくりかえしている。

キリスト教信者でノー

ベル医学賞をうけたえらい博士は「人間は自然科学者がこれまで作りあげてきた狭い宇宙の中でしかものを考えられないか

らない。二十世紀の科学が使っている、時間や空間という単位では、とうてい説明のつかないこの世とは全く別の、異次元の世界があるはずだ。

今の我々の頭では、とうてい理解が出来ないだけのことである」と言っておられるが、「青い光の中に人間が消えてゆく」というこのような考えかたのほうが、はるかに明か

る。二十世紀までの科学は「地球が誕生したときにはあついマグマがなく

やがて、海が出来、三十五億年前に細菌のような生命体が生まれ、それが進化して、あるものが人間になった。しかし、地球をつつみこむ宇宙も、

広大な時の流れの中では死に向かつており、その営みの中に小さな人間がいるだけである」と言うが、宇宙のはじまりも終りもよくわかつてはいない。

そんなことにはおかまいなく、たいがい人間は楽天的かつ独善的であるから(お迎えの川がす

ぐうしろに流れていることも知らず)いくつになつても「自分はまめ、あと十年は大丈夫だろう」と思うように出来ている。

「満足してすごした一日が、安らかな眠りを与えてくれるように、よく用いられた一生も安らかな死を与えてくれる。」

こんな言葉も、日頃のいそがしさの中にかき消されてしまっている。

皆さんが、来年の今日も、いそがしさの中に、無事新年を迎えることが出来ることを祈ります。